

臨床心理学において質的研究はどのように語られてきたか

ー質的研究の認識論における臨床的可能性に向けてー

野田 実希

1. 問題・目的

近年、臨床心理学領域において質的研究が広がりを見せている。質的研究に関する解説書が多数出版され、質的研究法を用いた研究成果が次々に発表されるなど、数十年前から「質的研究ブーム」（佐藤，2008）と言える現象が生じ、現在では研究法として定着したものになりつつある。海外においても、臨床心理学の学位論文に質的研究法を用いる学生は 2006 年の時点で 42%以上にのぼり、その数は増えていることから（Harper, 2013）、質的研究と臨床心理学の関連深さが指摘されている（McLeod, 2000/2007；能智, 2011）。

従来、心理学における研究は、自然科学モデルに基づいた客観的な数量的理解が重視されてきた。統計的にデータを処理し、仮説検証の方法をとる量的研究は、主観を排除し、対象となる現象を統制された条件下で調べる法則定位的なアプローチである。一方、臨床心理学においては、Freud, S.を代表とした事例研究が主流であった。これは、詳細な治療過程を記述しながら事例の検討を行う個性記述的なアプローチである。しかし近年では、臨床領域においても実証性が求められるようになり、系統的かつ厳密に介入過程を記述し、新たなモデルを生成する必要性が問われるようになった（McLeod, 2000/2007）。こうした時代の要請を受けながら、質的研究は、能智（2013）ややまだ（2013）が指摘しているように、2つの伝統的な研究法の狭間で発展し、量か質かの二元分割を超えて、質を記述しながら一般化を志す方法を探索してきた。

質的研究は、「世界がどのように構成されているのかについての理解を深めること」を第一の目的としており（McLeod, 2000/2007）、個々人の体験が作り出されるプロセスと体験の意味に焦点が当てられるとされている（岩壁, 2010）。藤川（2006）によると、質的研究における分析は、コード化とカテゴリ化を目指す方向性と、テキストの時間の流れに沿った構造を明らかにしようとするシークエンス分析と呼ばれる方向性に分けられる。前者には、KJ法、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTA）、質的内容分析などが含まれ、後者には、ナラティブ分析、ディスコース分析、客観的解釈学などが含まれる。

質的研究は様々な学問領域において考案され、発展してきた。KJ法は日本の文化人類学者である川喜田（1967）が発案し、GTAはアメリカの社会学者であるGlaser & Strauss（1967）が発案した質的データの分析法であり、両者ともボトムアップから理論を生成していく方法論である。解釈的現象学的分析（IPA）を含む現象学的アプローチは、人がどのように世界や体験を理解し意味づけているのかについての「生きられた経験」を当事者の視点から明らかにすること

を目的としており、現象学、解釈学、個性記述学などの多様な理論的背景を持っている (McLeod, 2000/2007)。またナラティブ分析は、テキストを物語 (ナラティブ) として解釈する多様な方法の総称である (Riessman, 2008/2014)。このように質的研究は、社会学、文化人類学、哲学、言語学などの学問領域で発展し、臨床心理学においても、主観を科学的に記述・研究するための新たな手法として導入された。

臨床心理学は、大別すると、臨床心理学的援助に関わる実践研究と、その基礎となる臨床心理的問題に関わる理論的研究がある。これらの研究分野と質的研究との関わりについては、前者では、質的分析法を用いて心理療法のプロセスを検討するなど、実践的見地から語られることが多い。Rennie (1994) の調査研究に代表されるように、90年代頃よりクライエントとともに面接を振り返り、体験の評価を行う研究も積極的になされている (McLeod, 2000/2007)。一方、後者のように、質的研究は臨床心理的問題に関わる理論的研究において用いられることも多くある。しかしながら、臨床心理学における質的研究は、事例研究との関連から論じられることが多く、質的研究イコール事例研究の一手法であるという誤解を招いている可能性がある。

質的研究は、妥当性・信頼性に乏しいという批判が向けられていると指摘されたり (Kopala & Suzuki, 1999)、語りやプロセスが分断されて全体性を失う (遠藤, 2006) などといった批判が見受けられることがある。前者は、法則定位的な立場から、後者は個性記述的な立場からの批判であるが、実践研究と理論的研究のそれぞれの分野の固有性が十分に考慮されずに、双方の立場から批判を向けられるという事態が生じている。このような方法論に関する批判は、方法論としての認識が混在していることに加えて、臨床実践と研究の馴染みにくさ (河合, 2002b) を抱える臨床心理学の独自性にもかかわっていると考えられるであろう。

他領域で発展してきた質的研究が臨床心理学においても広がりを見せている現在、臨床心理学において質的研究を行うとはどのような意義や独自性を持つのであろうか。質的研究法を活かしながらこれからの臨床心理学の発展につなげていくためには、これまで臨床心理学において語られてきた質的研究法論を整理する必要があるであろう。そのため本稿では、質的研究、特に、ナラティブ (語り) に焦点を当てた質的研究の方法論に関する国内の文献を概観し、臨床心理学における質的研究の課題と可能性を検討することを目的とする。質的研究が対象とする素材はナラティブ以外にもあるが、ナラティブが構築される場という点において、質的研究と臨床心理実践は深く関わっており、そのためナラティブに対する認識上の融合や誤解が生じやすいという背景から、本稿ではナラティブを扱った質的研究の方法論に焦点を当て論じたい。

2. 方法

本稿は、臨床心理学における質的研究に関する文献について概観し、整理することを目的として、スコーピングレビュー (Arksey & O'Malley, 2005) の手続きに則った。スコーピングレビューとは、先行研究を体系的に検索・選択し、それらを集約することによって、これまでの知見を統合し、主要な概念や特定の領域における調査の差異や隙間をマッピングする手法である。具体的には、(1) リサーチクエスションの同定、(2) データベースや参考文献、ウェブサイト等を用いた関連論文の検索、(3) リサーチクエスションに関連した論文の選択、(4) データのチャート化、(5) 統合と要約 (Colquhoun et al., 2014) という段階を経る。対象論文は、医中誌のデー

データベースを用いて 2018 年 7 月～8 月に検索をおこなった。本稿では、わが国での臨床心理学における質的研究法論の動向について整理することで、その課題を抽出することを目的としたため、日本国内の論文に限定し、検索キーワードを「臨床心理学/心理臨床/カウンセリング」「研究法」で設定して検索したのち、ナラティブを扱った論文を抽出した。これらに加えて、収集した文献の引用文献から関連論文を辿るハンドサーチをおこない、新たに文献を収集した。

3. 結果

以上の手順を踏んだ結果、計 42 本の論文がレビュー対象となった。対象論文について、(1) 質的研究の方法論の変遷、(2) 質的研究法の分類、(3) 事例研究をめぐる方向性、(4) 質的研究におけるナラティブという 4 つの視点から質的研究の動向を論じた。なお、検討するための視点を複数設定したため、1 つの論文を重複して取り上げることもある。また本稿では、質的研究の各アプローチについての詳細は説明を省いたため、文献を参照されたい。

(1) 質的研究の方法論の変遷

臨床心理学分野において質的研究は、国内では 2000 年頃から下山 (2002) や木下 (2003) などによってその具体的な方法とともに紹介され、広く知られるようになった。質的研究は急速に発展し、それぞれのアプローチにおいて派生したり改良が加えられたりしているため、技法の種類は多岐にわたるが、ここでは臨床心理学との関連から、代表的なアプローチの展開について概観してみよう。

まず、GTA は、データに根差した (grounded on data) 分析から理論を生成する方法として考案され (Graser & Strauss, 1967)、社会的相互作用に関係し、現象や人間の行動の変化と多様性のプロセスを説明し、実践の活用を促す理論であると紹介されている (木下, 2003)。GTA は、質的研究の中でもより系統的な分析手法であるが、理論が生成されるまでデータに徹底的に向き合うため、膨大な時間がかかることから、切片化や理論生成をめぐって議論が起こり、創始者間で対立が生じたことをきっかけに、様々に分化していった。わが国の臨床心理学においては、ナラティブデータを切片化せずに分析テーマを導入した修正版 GTA (M-GTA) (木下, 1999) が広く用いられている。木下 (2003) は、GTA の手法において、臨床心理的アプローチよりも距離をとった外部化・対象化の視点を強調している。一方、能智 (2013) は、社会構成主義の視点に基づく Charmaz 版 GTA (2006) を紹介し、データと研究者間の相互作用を重視している。

それまでの自然科学主義に基づく量的研究に対する限界や批判から質的研究は広く展開し、量の拡大を見せる中で、「量か質か」という議論が呼び起こされるようになった。こうした議論に対して、藤川 (2006) や遠藤 (2013) は、量的・質的研究は対立するものではなく相補的であり、両方の研究法をハイブリッド的に用いることを強調している。様々な技法を用いるミックスメソッドやトライアンギュレーションなどがその例である。こうした議論の中には、量的研究の妥当性や客観性の概念に沿おうとする立場 (岩壁, 2009) と、質的研究における独自の評価基準を打ち出そうとする立場の 2 つが見てとれる。前者は、当事者とともに分析結果を検討し、相互の現実を作り上げるトランスビュー (Trans-View) の手続きなどを重視し (安田, 2014)、「臨床的妥当性」を担保しようとする試みである (藤川, 2013)。一方後者は、質を評価

する基準として、能智（2008）の示した「依拠可能性（dependability）」、「信憑性（credibility）」、「転用可能性（transferability）」の3点を挙げている（中田，2010）。特に「転用可能性」では、量的研究が一般化を目指すのに対して、理論が他の事例にも転用でき、新たな理解につながる可能性が強調されている（梁，2007；斎藤，2014）。

このような議論の中で、2014年頃から、複線経路等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）が知られるようになった。TEMは、個人の経験の多様性や複線性を時間と文脈の中で捉えることを目指す技法であり、野口（2014）や安田（2014）などによって実際例が紹介されている。安田（2014）によると、TEMは当事者の経験と研究者の主観の融合から物語世界が生成される過程を重視し、リフレクティブな臨床心理実践につながる手法であるとされる。また同年代に、藤岡（2013）が実際例を用いて合議制質的研究法を紹介し、分析過程に「強制的でない一致した決定」という合議のプロセスを提示している。さらに近年では、当事者研究が臨床心理において紹介されるなど（山本，2014；熊谷，2015；村上，2017）、対象者への理解に際して、対象者と調査者間の関係性と相互協力を重視する動きが高まっている。

一方で、現在広まりつつある質的研究の在り方について批判的に再考する動きもある。本来、質的研究では、事例の数よりも一つ一つの事例の描出や、「厚い記述」と呼ばれるデータの豊富さが重要視されてきたにもかかわらず、事例の数（対象者数）の多さが質的研究においても重要であると主張する研究者が数多くいることが、中田（2010）や山川（2014）によって指摘されている。山川（2014）は、質的研究において対象者の量的拡大を課題に掲げることは量的研究のパラダイムと発想が変わらないことを指摘している。また藤川（2006）は、個別性に根差した質的研究が、量的研究の概念である妥当性を問う立場を疑問視し、一般化をめぐることは立脚する理論的背景を異にする対立があるものの、一般化を認める立場であっても具体的方法を洗練させる余地が残されていることを指摘している。このように、質的研究の質や臨床心理実践との関連をめぐる議論と同時に、臨床心理学における質的研究の在り方が問われてもいる。

（2）質的研究法の分類：事例研究と質的研究の混在

質的研究は心理臨床実践との親和性が高く（木下，2003；能智，2011）、藤川（2006）が述べているように、当事者の語りの主観的な意味内容に焦点を当てることから、研究対象と共に研究者もその場の一部を構成し、深く関与しながら研究をおこなう。このことから、中田（2010）や斎藤（2014）が述べるように、事例研究法は質的研究の一つとして捉えることが可能であろう。しかし、臨床心理学の実践研究において、質的研究の方法論はこれまでの事例研究の在り方を批判的に論じる際に用いられることが多く、その論では質的研究と事例研究が区別されている。したがって、臨床心理学においては、事例研究法を質的研究に含める立場に加えて、事例研究を質的研究と別個の研究法として捉える立場という2つが存在していることになる。

事例研究を質的研究から区別する立場では、主に実践に関わる介入や治療技法、効果検討のための方法論として質的研究が語られることが多い。岩壁（2009）は、効果研究との関連から、質的研究法を用いた事例研究を紹介し、系統的な方法論の必要性を強調している。このような立場では、個別のプロセスを重視しながら、研究者自身の主観を内省するというリフレクシビリティの概念が重要視されている（廣瀬，2014；松下ら，2016；横山ら，2016）。また近年では、

能智（2013）や横山ら（2016）が述べるように、語りのプロセス全体の流れを分析しようとするシークエンス分析などの「今、ここ」での体験を捉える分析法が、心理療法の実践的な固有性と重なるものとして、事例研究に取り入れられている。これは質的研究の認識論というよりも、質的研究の分析手法を取り入れて応用した立場であるといえる。

一方で、事例研究法を質的研究の一つとして含める立場がある。斎藤（2009；2014）は、事例研究を「質的研究としての事例研究」と位置づけた上で、「原則として一事例についてのプロセスから詳しいデータを収集し、収集されたデータの分析から、何らかのパターン・構造仮説・理論モデルなどを生成することを試みるタイプの研究法」（斎藤，2014）と定義している。また能智（2011）は、個性記述の研究について、Freud, S.が事例の詳細な記述と考察をしていたことに対して「広い意味での質的研究」としている。この立場は、質的研究の認識論的背景を前提として事例研究法を捉えているといえる。質的研究は本来、当事者の語りに寄り添い、体系的な理解を導くために発案された研究の在り方である。このような視点は、近年では主に臨床心理的問題の探索や理解を中心とした理論的研究にはいくつか応用される例があるものの、臨床心理学における議論においては、もっぱら実践研究を再考する際に論じられているという現状がある。このように、臨床心理学では、実践研究と理論的研究の違いから、事例研究法を質的研究に含めるか否かによる立場が混在しており、このことが質的研究の方法論が複雑化する理由となっているといえる。

（3）事例研究をめぐる方向性：臨床心理学研究をめぐる答えに何を求めるか

（2）で論じた、事例研究を質的研究に含めるか否かという混在した議論の背景には、事例研究の定義をめぐる混在した動きがある。そのためわが国での事例研究の展開について整理する必要がある。日本の心理臨床において事例研究が中心的となった契機の一つは、1974年の京都大学の事例研究を中心とする紀要『臨床心理事例研究』の発行であったと言われている（渡邊，2017）。梅本論文（1974）において、臨床心理学研究は、臨床体験に基づいた臨床心理学の知識体系を客観的な形で妥当性と有効性を立証しながら確立することが期待された。その後、臨床心理学における研究とはどのようなものであるかについて、実践性を基盤としながら、自然科学とは異なる独自の在り方をめぐる議論が重ねられてきた。山川（2014）によると、河合（1976）の「臨床の知モデル」と「物語論」に代表される事例研究法と、「統合的事例研究法」（下山，2000）に代表される法則志向的な事例研究法といった2つの方向性に分けられる。

前者は、個性記述研究を重視し、臨床心理学における研究の在り方を事例の内部、つまり事例性に求める立場である。臨床心理学の実践は、個別で一回限りのものであり、クライアントの全存在にかかわるものである（河合，1976；伊藤，2003）。そのため、藤川（2006）や山口（2006）が指摘するように、臨床心理学の実践は、従来の自然科学で説明されていた因果律や要素には還元されえず、仮説検証型の量的研究では多様な個別な対象を捉えることが困難であると主張されている。臨床心理学の発生は、心の病に悩む人をいかにして治療するかであり、個人の主観の世界を対象とせざるを得ないことから、臨床心理学は主観を扱い、研究者と研究対象との間に関係が生じるという学問の独自性が強調された（河合，2002a）。もとより、「研究」と称されるためには科学論文としての目的を持つべきであるとされ、河合（1976）は、「ひとつの事

例の治療体験をだらだら記述しただけでは、科学論文としての価値は低い」と述べ、事例研究の目的を整理している。そこでは、臨床心理学における研究とは何かについて、「関与しながらの観察」(Sullivan, 1954)を目指す学問として、「主観的関与と客観的観察という両立し難いことを両立させる」(河合, 1976)という実践と研究をめぐる動きがあった。

一方で、河合(2002b)は、「表層的な事実について多くの例を集めても、あまり臨床的な意味を持たない」ことや、「ひとつの症例について何例かをまとめ、それについて普遍的な法則を見出すような論文よりも、ひとつの事例の赤裸々な報告の方が、はるかに実際に『役立つ』」(河合, 1976)と述べ、研究論文の形式と臨床的な意義を区別して論じている。また、自然科学モデルにおける一般性や普遍性に対しては、「一個人の全体性を損うことなく、その個人の世界を探究した結果は、臨床家が他の個人に接するときに共通のパターン、あるいは型を与えるものとしての普遍性をもつ」(河合, 1976)と述べられ、個々に固有な内的な物語によって、個々の事実を超えた普遍性があるとされる(伊藤, 2003; 岡田, 2003)。このような一回限りの出会いに基づいた個々の詳細な記述が、臨床家である聞き手にとって实际的に役立つものとして重要であるとされている(河合, 2002b)。河合(1976)の個性から浮かび上がる普遍性の考え方は、その後、山川(2014)や渡邊(2013; 2017)にも紹介され、渡邊(2013)は、このような事例研究からは、個々の事例の持つ「絶対性」や実存的側面の実感的理解が獲得されると述べている。しかし一方では、心理臨床家が事例研究をどのように読み、何を得ているのかについてはあまり明らかにされていないことが指摘されている(渡邊, 2013; 山川, 2014)。事例研究における事例の持つ力は、それ自体普遍性を持ち、臨床心理学研究の発展に寄与するものであろうが、それらの知見がどのように積み重ねられていくかは、受け手である個々の心理臨床家の問題となり、その実情については議論の余地が残されているといえるであろう。

他方、事例研究における2つの方向性の内、後者は法則志向的であり、自然科学における実証の仕方に倣いながらも、臨床心理学独自の方法論の確立を目指している。下山(2000)の統合的事例研究法は、一事例に見出された仮説を他の事例と比較し、モデルを生成していく方法論である。下山(2002)は、国内では明確な方法論を持たない事例研究が多く、国際的な動向との乖離があると指摘した。また、岩壁(2009)や藤川(2013)が述べるように、個別の事象を一般化して根拠を示しながら論理的に提示する必要があるなど、従来の一事例研究に対する批判や、社会へのアカウンタビリティ(説明責任)の要請を受け、実践研究を進展させようとする動きがある。岩壁(2013)は、一事例研究は、方法論の系統性やデータ収集と分析の妥当性ならびに信頼性が欠けていると指摘し、効果研究とプロセス研究による事例検討が必要であると強調している。

このような議論の中で、臨床実践における個性を重要視しながら、質的に究明しようとする質的研究法に注目が向けられるようになったと藤川(2006)が述べているように、体系的な分析手法をもつ質的研究が導入された。また、質的研究の方法論は、前述の「関与しながらの観察」(Sullivan, 1954)における、自身の言動を反省的に対象化しながら臨床活動を進める臨床実践と重なった。この点について能智(2013)は、「対象を客観的な対象として突き放して眺めた客観的な知識ではなく、具体的な関係の文脈のなかで得られる『関係的な知』」が生み出されるとしている。また、質的研究における「絶えざる比較」や「理論的サンプリング」の概念は、

他者性や他者の他者性と向き合い、出会うための対話的な過程であるともされている（能智，2013）。能智（2009）は、事例が研究性を帯びるためにはプロセスやリフレクシビリティの視点が重要であるとした。特にリフレクシビリティは、事例を分析する際の適切性を担保するものとして強調されている（野村，2014；安田，2014；廣瀬，2014）。こうした質的研究の視点は、事例について多面的観点からの記述と分析を可能にするとし（斎藤，2014）、客観性と普遍性を持つと考えられている（渡邊，2017）。また最近では、量的データを用いて事例の特徴を明確に示し、質的データを用いてデータの流れを示すという系統的事例研究が、岩壁（2010）や野田（2015）などによって実践されている。このように、実証性を高めて系統的に実施することの必要性を主張する立場によって、質的研究の分析手法が取り入れられ、応用されている。

これまで見てきたように、事例研究においては、「研究（research）」とは如何なるものかについての議論をめぐって2つの流れがあり、一つは事例の内部にある個性性に求め、一つは系統的な手法を用いた実証性に求めている。これに加えて、荻阪（1976）や下山（2002）が論じているように、「事例研究」、「事例検討」、「事例報告」を区別する立場がある一方で、中田（2010）は、研究（research）としての事例研究と実践（practice）としての事例研究に分類した上で、どちらも広い意味での事例研究としているなど、様々な立場から議論が繰り広げられており、未だ結論は出ていない。こうした議論が、臨床心理学における事例研究ならびに質的研究の議論を複雑化させているともいえる。

（４）質的研究法におけるナラティブ

（３）で述べたように、事例研究をめぐり新たな方法論を確立しようとする流れもある一方で、ナラティブの概念が、医学をはじめとした自然科学にも導入され、科学的なものの中に物語という質的なものの意義を見つけないというナラティブ・ベイスト・メディスン（NBM）が提唱されている（Greenhalgh & Hurwitz, 1998）。そして臨床心理学においても、当事者のナラティブが当事者理解につながるという考え方が斎藤・北（2001）や斎藤（2008）によって紹介されているように、改めてナラティブの概念が見直されている。質的研究もまた、前述のとおり量か質かという二元分割を超える方法論として発展し、その背景にはナラティブを重視するという特性がある。ここでは、これまで臨床心理学の方法論としてあまり論じられてこなかった、ナラティブ生成の場としての質的研究の臨床的意義を探るために、ナラティブがどのように語られてきたかについて概観する。

まず、ナラティブには、経験を語ることによって「つなぐ」という機能がある。個々人が体験を語るためには、出来事や思考などの断片を結びつけて言葉を紡ぐ。人はこうした言葉をつなぎ合わせることによって物語を作り上げると言われている（斎藤・北，2001；河合，2005；森岡，2005）。これは、「切る」自然科学と対比されて「つなぐ」物語と位置づけられており（森岡，2008）、自然科学モデルにはない臨床性が内在している。このように物語ることで、個人は新たな意味づけや解釈を通して自己を統合し、再構築していく（森・福島，2007）。また森岡（2005）は、過去の出来事について現在語ることで、語られた出来事（narrated events）と出来事を語ること（narrating events）が混ざり合い、「語ることがその人が在ることと深くつながっている」と論じている。このようにナラティブは、個人が出来事やその人自身を意味づけ、位

置くことで、語る「私」と語られる「私」をつかむ心の作業でもあることが示されているが、これは、心理臨床だけではなく、質的研究の語りの場でも生じているといえる。

次に、ナラティヴは相互行為であり、状況や文脈依存的である。特に社会構成主義では、ナラティヴは固定的なものではなく、語り手と聞き手の相互関係の中で構築された対話的な構築物であると考えられており（山口, 2006; 野村, 2014; 山本, 2014）、つねに流動的であるため、唯一正しい物語というものはないとされる（山本, 2014）。ここにも「つなぐ」という機能があり、ナラティヴは、語られた内容と語り手との「関係」をつなぐだけではなく、語り手と聞き手との間の「関係」をもつなぐ（河合, 2005）。この関係性は、心理臨床におけるセラピストとクライアントの間だけではなく、質的研究における聞き手（インタビュアー）と語り手（情報提供者）の間でも生じている。そのように共有されたナラティヴは、その後解釈され、読み手に共有されていく。山口（2006）によると、質的研究には、語ること、語りを解釈すること、読者に読まれること、という3つのミメシス¹があり、それぞれが別の次元で生じていると考えられている。このような内的な経験の記述が共有可能なものとなった時に、ナラティヴは実践的な効果を持つと考えられており（村上, 2017）、ここに、質的研究におけるナラティヴの臨床的意義が示されているといえるであろう。

4. 考察

臨床心理学において質的研究がどのように語られてきたのかについて、（1）質的研究の方法論の変遷、（2）質的研究法の分類、（3）事例研究をめぐる方向性、（4）質的研究におけるナラティヴという4つの視点から概観してきた。質的研究の相互関係性を重視する点や研究者の主観を内省する点などが臨床心理学の独自性との関連が深いことから、臨床実践と研究の接点をめざす臨床心理学に質的研究が取り入れられたことが示された。さらに、臨床実践である事例研究法を質的研究の一手法として捉えるか否かによって立場が異なり、また事例研究をめぐっても2つの異なる方向性があることから、質的研究をめぐる議論が複雑化している現状も浮き彫りになった。

臨床心理学における質的研究がどのように論じられているのかについて、再度整理すると、事例研究における研究の在り方が模索される中で、自然科学モデルに代わる独自の指標を明確にするため、つまり、臨床実践における実証性を担保するための手法として論じられてきたといえる。その中で、質的研究自体が様々な技法へと派生し、臨床心理学においても、実証性の要請に応えるように新たなアプローチが次々と導入されている。最近では、量と質を組み合わせたり、複数の研究法を用いることがトレンドとして挙げられるが、研究法を増やすことで実証性が高まると安易に考えてはならないであろう。これは、岡田（2003）が指摘する「消極的な事例研究法の使用法」ともいえる。自然科学的な統計的手法を事例研究と相補的に用いるのは、臨床心理学における研究法がそれほど厳密に確立していないため（岡田, 2003）と考えられている。このような傾向は、遠藤（2006）が指摘するように、質的研究の方法論の形骸化を

¹ リクール（Ricoeur, P.）の理論を基に説明した概念であり、「実践的・理論的双方の要素を含む象徴世界を産出する行為」（山口, 2006）のことである。

招いていると考えられる。研究の質を高めるためには、個々のアプローチでどのように事象を描き出しているかを追求することが不可欠であろう。一方で、臨床心理実践における質的研究の方法論は、実証性を重視する他領域との共通言語を探っているとも捉えられる。臨床心理学の個別性を共有可能な知見として説明するために、他領域と認識論を共有することは重要であろうが、近年の臨床心理学における質的研究は、ナラティブを通して生成された知見ではなく、形式的な側面に偏重して論じられているともいえる。

能智（2009）が「実践研究とより密接な関わりをもっているのは質的研究の方法や手続きではなく、むしろ質的研究の視点」と指摘しているように、手法そのものや方法論の厳密性に固執するのではなく、それぞれの手法の特性を理解した上で、臨床実践の知に資するために理解を深め、応用していくことが重要であろう。質的研究は、前述のとおり、語りのプロセスや全体性が失われるという批判（遠藤，2006）があるように、事例のもつ個別性や全体性を切り捨てる手法であるという誤解が、実践研究だけではなく臨床心理的問題に関する理論的研究にも向けられている。質的研究法は、当事者が語り、語られ、共有されるという豊かなナラティブの生成の場としての意義を持つものであるが、現在の方法論についての議論を概観すると、こうしたナラティブに含まれる認識論的意義が見落とされているといえる。改めて、質的研究が目指してきた背景に立ち戻ると、それは、個別の関係性の中で構築されるナラティブを通して対象を理解することであろう。ナラティブには、個人の主観や経験と密接に関連した「思考としてのナラティブ」と「産物としてのナラティブ」があるが、ナラティブが語られた後、聞き手は自身の「思考としてのナラティブ」に沿って整理・再話することで、新たな「産物としてのナラティブ」が生まれる（能智，2006）。このように質的研究の場において、研究として共有可能な臨床的知が生成されていくという点において、分析手法としてだけではない、研究対象としての臨床的な奥深い可能性があるといえるであろう。そしてこの可能性は、実践研究のみならず、理論的研究においても改めて見直されることが期待される。

5. おわりに

本稿では、臨床心理学における質的研究がどのように語られてきたのかについて、先行文献を概観し、検討してきた。論文の選択基準については、選定段階での筆者の理解の偏りが影響した可能性や、データベースに登録されていない論文がある可能性も否定できない。しかし、臨床心理学における質的研究法について、曖昧であったその位置づけを整理し、その課題と可能性を検討したことは一定の役割を果たすことが期待される。臨床心理学には、実践研究と理論的研究があり、前者に含まれる事例研究をめぐる様々な立場があるため、質的研究をどのように捉えるかについても議論の渦中にあるといえる。しかし、ナラティブの側面から質的研究を概観すると、心理臨床との重なりが浮かび上がる。その中で、質的研究におけるナラティブと、心理臨床におけるナラティブはどのように重なり、どのように異なるのであろうか、という疑問が立ち上がる。「人生、生は始まりもなければ終わりもない。物語はそれに比して始まりと終わりを要する」（森岡，2007）と論じられているように、「私」について語るとは、本来語りえぬものを語るという行為でもある。その視点に立つと、両者の差異を問うこと自体に意味があるのだろうか、という疑問も残る。いずれにしても、質的研究はこうしたナラティブ

の豊かさを教えてくれる手法である。臨床心理学においては、このような質的研究の認識論が持つ臨床的な意義と、質的研究法が生み出す一つの世界の見え方への可能性について、さらに意識的であることが求められるであろう。

6. 引用文献

- Arksey, H. & O'Malley, L. (2005). Scoping studies: Towards a methodological framework. *International Journal of Social Research Methodology*, **8**, 19-32.
- Charmaz, C. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage.
- Colquhoun, H.L., Levac, D., O'Brien, K.K., Straus, S., Tricco, A.C., Perrier, L., Kastner, M., & Moher, D. (2014). Scoping reviews: time for clarity in definition, methods, and reporting. *Journal of Clinical Epidemiology*, **67**, 1291-1294.
- 遠藤利彦(2006). 質的研究と語りをめぐるいくつかの雑感. 能智正博(編). <語り>と出会う——質的研究の新たな展開にむけて. ミネルヴァ書房, 191-235.
- 遠藤利彦(2013). 「質」と「量」を組み合わせる. 臨床心理学, **13**, 360-364.
- 藤川 浩(2006). 質的研究を考える——心理臨床を研究する方法として. 臨床心理学, **6**, 113-117.
- 藤川 麗(2013). リサーチデザインの選び方——実践研究の質を高めるためのヒント. 臨床心理学, **13**, 328-332.
- 藤岡 勲(2013). 質的研究の新たな発展——合議のプロセスを用いた質的研究. 臨床心理学, **13**, 356-359.
- Glaser, B.G. & Strauss, A.L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine. 後藤 隆・大出春江・水野節夫(訳)(1996). データ対話型理論の発見——調査からいかに理論を生み出すか. 新曜社.
- Greenhalgh, T. & Hurwitz, B. (1999). Narrative based medicine: Why study narrative? *BMJ*, **318**, 48-50.
- Harper, D. (2013). Reflections on qualitative research in clinical psychology training. *Clinical Psychology Forum*, **243**, 20-23.
- 廣瀬幸市(2014). 事例を資料とするときに留意すること. 臨床心理学, 増刊 **6**, 116-122.
- 伊藤良子(2003). 心理臨床の研究——普遍性といかに出会うか. 臨床心理事例研究, **30**, 26-28.
- 岩壁 茂(2009). 実践研究を発展させるために——心理療法の効果とプロセスの研究から. 臨床心理学, **9**, 14-21.
- 岩壁 茂(2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究——方法とプロセス. 岩崎学術出版社.
- 岩壁 茂(2013). 臨床心理学における研究の多様性と科学性——事例研究を超えて. 臨床心理学, **13**, 313-318.
- 河合隼雄(1976). 事例研究の意義と問題点——臨床心理学の立場から. 臨床心理事例研究, **3**, 9-12.
- 河合隼雄(2002a). 臨床心理学の研究法. 臨床心理学, **2**, 3-4.

- 河合隼雄(2002b). 臨床心理学——見たてと援助、その考え方. 臨床心理学の研究法. 臨床心理学, **2**, 83-88.
- 河合隼雄(2005). 物語の知・臨床の知——夢の物語. 臨床心理学, **5**, 547-552.
- 川喜田二郎(1967). 発想法——創造性開発のために. 中央公論社.
- 木下康仁(1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生. 弘文堂.
- 木下康仁(2003). 「臨床」におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチのすすめ. 臨床心理学, **3**, 887-892.
- Kopala, A. M. & Suzuki, L. (1999). *Using qualitative methods in psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 芋阪良二(1976). 臨床心理学と Case Study. 臨床心理事例研究, **3**, 1-4.
- 熊谷晋一郎(2015). 当事者研究の理論的考察. 臨床心理学, **15**, 791-798.
- 松下弓月・川上侑希子・眞柄翔太・能智正博(2016). 臨床心理学的実践の学びにおける質的研究の意義(1)——全般的展望. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, **39**, 66-73.
- McLeod, J. (2000). *Qualitative research in counseling and psychotherapy*. London: Sage. 下山晴彦(監). 谷口明子・原田杏子(訳)(2007). 臨床実践のための質的研究法入門. 金剛出版.
- 森 美保子・福島脩美(2007). 心理臨床におけるナラティブと自己に関する研究の動向. 目白大学心理学研究, **3**, 147-167.
- 森岡正芳(2005). 今なぜナラティブ?——大きな物語・小さな物語. 臨床心理学, **5**, 267-272.
- 森岡正芳(2007). 物語の構成力. 臨床心理学, **7**, 257-261.
- 森岡正芳(2008). 物語論から神話の心理学へ. 臨床心理学, **8**, 35-40.
- 村上靖彦(2017). 当事者研究と現象学. 臨床心理学, 増刊 **9**, 61-65.
- 中田洋二郎(2010). カウンセリングの研究におけるエビデンスを求めて——臨床実践における質的研究の意味. カウンセリング研究, **43**, 297-303.
- 野田亜由美(2015). 研究方法としての事例研究——系統的事例研究という視点から. お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, **16**, 45-56.
- 野口康彦(2014). 心理臨床研究における質的研究法の活用——複線経路・等至性モデルを中心に. 人間と科学, **21**, 43-53.
- 野村晴夫(2014). 語りからデータを得て実証する. 臨床心理学, 増刊 **6**, 66-72.
- 能智正博(2006). “語り”と“ナラティブ”のあいだ. 能智正博(編). <語り>と出会う——質的研究の新たな展開に向けて. ミネルヴァ書房, pp. 11-72.
- 能智正博(2008). 「よい研究」とはどういうものか——研究の評価. 下山晴彦・能智正博(編). 心理学の実践的研究を学ぶ. 新曜社, pp. 17-30.
- 能智正博(2009). 質的研究法の視点と実践研究. 臨床心理学, **9**, 22-26.
- 能智正博(2011). 質的研究法. 東京大学出版会.
- 能智正博(2013). 臨床心理学における質的研究のあり方と可能性. 臨床心理学, **13**, 352-355.
- 岡田康伸(2003). 心理臨床学における研究. 臨床心理事例研究, **30**, 15-18.
- Rennie, D. L. (1994). Clients' deference in psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology*, **41**, 427-437.

- Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human science*. Thousand Oaks, CA: Sage. 大久保 功子・宮坂道夫(監訳)(2014). 人間科学のためのナラティブ研究法. クオリティケア.
- 佐藤郁哉(2008). 質的データ分析法——原理・方法・実践. 新曜社.
- 斎藤清二・北 啓一朗(2001). EBM から NBM へ——物語りと対話に基づく医療. 臨床心理学, **増刊 1**, 541-546.
- 斎藤清二(2008). 事例研究という質的研究の意義. 臨床心理学, **8**, 27-34.
- 斎藤清二(2009). 実践と研究——質的研究と量的研究. 臨床心理学, **増刊 1**, 29-34.
- 斎藤清二(2014). 事例を通した仮説生成と検証. 臨床心理学, **増刊 6**, 128-134.
- 下山晴彦(2000). 事例研究. 下山晴彦(編). 臨床心理学研究の技法. 福村出版, pp. 86-92.
- 下山晴彦(2002). 日本の臨床心理学研究の特異性. 臨床心理学, **2**, 15-19.
- Sullivan, H.S. (1954). *The psychiatric interviews*. New York: W. W. Norton & Company.
- 梅本堯夫(1974). 臨床心理学における研究論文の意義——序言にかえて. 臨床心理事例研究, **1**, 1-2.
- 渡邊 誠(2013). 臨床心理学における事例研究の役割に関する考察. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, **118**, 225-234.
- 渡邊 誠(2017). 臨床心理学における事例研究の位置づけと課題. 看護研究, **50**, 455-460.
- やまだようこ(2013). 質的心理学の歴史. やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也(編). 質的心理学ハンドブック. 新曜社, pp. 24-53.
- 山口智子(2006). ナラティブと心理療法——研究としてのライフストーリー法. 臨床心理学, **6**, 391-396.
- 山川裕樹(2014). 事例研究に存在する 2 つの方向性——事例に基づく普遍性を求めて. 臨床心理学, **増刊 6**, 101-105.
- 山本智子(2014). 当事者研究——伝えたいことを伝えていくために. 臨床心理学, **増刊 6**, 166-170.
- 梁 誠崇(2007). グラウンデッドセオリーと現象学的記述の位相についての一考察. 大阪大学教育学年報, **12**, 27-40.
- 安田裕子(2014). 質的データをどう扱うか——質的研究の手ほどき. 臨床心理学, **増刊 6**, 94-100.
- 横山克貴・堀内多恵・古井 望・能智正博(2016). 臨床心理学的実践の学びにおける質的研究の意義(2)——近年の発展. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, **39**, 74-81.

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2018 年 8 月 30 日、改稿 2018 年 11 月 22 日、受理 2018 年 12 月 21 日)

野田：臨床心理学において質的研究はどのように語られてきたか

臨床心理学において質的研究はどのように語られてきたか

—質的研究の認識論における臨床的可能性に向けて—

野田 実希

臨床心理学において質的研究は広く用いられるようになったが、その位置づけは未だに曖昧であるため、方法論について整理することが必要である。本稿では、質的研究に関する国内の文献を検討することで、臨床心理学における質的研究の課題と可能性について論じた。スコーピングレビューに基づいて選択された42本の論文について、質的研究の方法論の変遷、質的研究法の分類、事例研究をめぐる方向性、質的研究におけるナラティブの4つの視点から検討した。臨床心理学において質的研究は、事例研究との位置づけが混在しており、主に臨床心理学的援助に対する効果・介入研究のための分析手法として紹介されることが多いことから、事例研究をめぐる議論に引き込まれる形で語られていることが示された。それにより、ナラティブを含めた質的研究の持つ認識論的世界観が見落とされていることが指摘され、ナラティブの生成の場としての研究的意義と可能性が示唆された。

Discussions on Qualitative Research in Clinical Psychology: Perspectives on Clinical Possibility in the Epistemology of Qualitative Research

NODA Miki

Qualitative research has become an increasingly popular approach in clinical psychology, but its methodology is often regarded as obscure and confusing. Therefore, organization of its arguments is required. This paper reviews articles on qualitative methodology and examines the problems and prospects of qualitative research. A total of 42 articles were selected using the scoping review method as a guide. These articles were examined from four viewpoints: evolution of qualitative research methodology, classification of qualitative research, issues and directions of case study research, and narrative aspects in qualitative research. In clinical psychology, qualitative research has occasionally been confused with case studies. Qualitative research has mainly been discussed as an analytical method for case studies, such as effect research or intervention studies. These show that qualitative research has caused disagreements over case study research. Hence, epistemological perspectives including the narrative aspects of qualitative research were overlooked, which highlights the significance of qualitative research where narratives are co-generated and constructed.

キーワード： 臨床心理学研究法、質的研究、事例研究、ナラティブ

Keywords: Research methodology in clinical psychology, Qualitative research, Case study research, Narratives